経済研究

第14巻第4号

October 1963　　Vol. 14 No. 4

現代不換通貨の論理

高木暢哉

まえおき

現代不換銀行券についての論争が，ここ数年来わが国において行われていた。今日においてもまだ終ってはいないようにみえる。わたくしはこの論争には，まだ積極的な意味においては参加したことはなかった。それに全く関心がなかったというのではない。わたくしの主たる研究が，それとは少しく離れたところにあったからである。もとよりわたくしの研究がこの問題と全然関係がなかったというわけのものではなかった。実のところ，わたくしのこれまでの研究はいくつかの点でこの問題に接触し，そのような場合には，わたくしなりの考えを述べることを回避はしなかったつもりである。それでもやはり不換銀行券の問題は，わたくしの主たる問題とはならなかった。わたくしは，いわばそれより手前のところで銀行信用というものを，これまでは扱ってきたのであった。銀行信用の研究を豊かで実りあらしめるためには，つまりはそれを具体的で包括的な視野で考察することができるためには，資本制再生産の総体という見地に立ってみなければならぬと考えていた。しかもその再生産というのは，それ自身矛盾に満ちて変動する動態でなければならず，そういう具体的総体の中に位置づけてこそ，銀行信用の機能や過程を正しく実り豊かに見究めることができはしないかと思ったのである[1]。ということは他面では，歴史における展望を必要とした。産業資本によって創り出された近代銀行制度は，産業資本のための制度であり，現実には歴史上生成して過程しゆく資本制再生産それ自身の展開によって規定される。したがってそれについての考察は，産業資本の史的展開ということとは切り離せない。史的発展の視野から眺められた銀行信用の形態や機能についての考察が平行して行われねばならなかった[2]。ところでこういう歴史的に理論的な考察において，今日の銀行制度が，独占資本や国家の機能のごときと結合し，癒着し，変容され，これまでのものとは区別されなければならぬ姿や過程を示すようになってきたことにも注意し，所々においてそれにつき指摘をしないわけではなかった[3]。それでもやはりわたくしのこれまでの研究の重点は，主に自由産業資本主義の時代における

1) 『再生産と信用』有斐閣，昭和32年刊。

2) 『信用制度と信用学説』日本評論新社，昭和34年刊。

3) 例えば，『再生産と信用』第5篇第2章「貨幣流通の組織的構造」および『信用制度と信用学説』第5章「中央銀行の性格と運営」などにおいて。

銀行信用におかれてきた。現代銀行券の研究を主題とするものではなかったのである。

そうであるからこそ今度は，右に述べたような思考の手順にしたがい，わたくし自身の研究を1歩進め，現時代における銀行信用の形態や機能がこれからは問題としてゆけるところに到達しているかにも思えるのであるが，といって実際に，これをどのようにおし進めてゆくかについては，やはり考えてみなければならぬ問題がないわけではない。例えば現代の銀行通貨は不換の銀行通貨である。それは兌換銀行通貨が不換化して生じたものにほかならない。そこで現代銀行通貨についての理論は，兌換銀行通貨についての理論を単に不換化という1点において修正するくらいのことで手軽にえることができるかどうかということである。産業資本の段階の銀行信用について学んだ知識が不換化という1点で修正されると，あとは担々と，そのまま引きのばされてゆき，現代銀行券の理論の道が開かれてゆくかどうか，そこにわたくしとしては疑問を感じる。

現代はもはや自由な産業資本主義の時代ではない。産業資本の段階から独占資本の段階へと移ってきている。しかも国家の役割が増し，国家独占資本と呼ばれる再生産過程が行われている。1930年代の大恐慌よりこのかた資本主義の構造や過程に顕著な変化が生じてきた。そういう変化は，第2次大戦後も，進みこそすれ，固まりこそすれ，後退するようなきざしをみせない。そういう現代資本主義における不換銀行通貨は，もとよりこうした資本主義のためのもの，それによって作られ，その過程のために仕えている。したがって産業資本主義における兌換銀行通貨を基準におき，それを不換化せしめることによってえられる程度の考察では，どうして現時代の不換銀行通貨の特殊に現時代的な性格を明らかにすることができるであろうか。資本主義自身が発展していって，現代銀行券という歴史的形態と機能とを生むにいたった。その考察のためには，段階を追う思考の前進に対応させ，特殊に現時代の銀行信用を点検するにふさわしい視野の段階的に新らしい更改といったものが必要とされはしないであろうか。つまりは現代銀行信用を考察するに当り必要と思える接近の角度または方法といったものについての反省である。

このように考えている際に，わたくしたちの前に一連の積極的成果を盛った業績が現われた。飯田繁教授のそれである。『現代銀行券の研究』と題し，全部で4巻が予定されている。すこぶる尨大で，また野心的な労作である。第1巻は『現代銀行券の基礎理論』といい，第2巻は『兌換銀行券と不換銀行券』，第3巻は『不換銀行券と物価』，第4巻は『日本銀行券と現代物価』ということになっており，このうち第1巻と第2巻とが，昭和37年と38年とに分かれてすでに公にされた。いずれも400ページを前後する大冊で，それぞれが主題としてかかげる問題についての丹念で克明な研究により埋められている。大体にいって，主題についての諸家の見解の批判的考察に主力がそそがれているが，もちろん批判者自身の立場とか見解といったものがこれと表裏していることは，いうまでもない。そうでなければ批判というものはありえない。批判の形で述べられている飯田教授の言説のなかから教授自身の拠りどころとされる原則とか体系のごときを掘り出して，考察を加えるということは，それ自身1つの課題となりうるであろうが，わたくしはここではそれをしない。さきにも述べたようなわたくし自身にとっての関心を中心に教授の著書から学んでみたいと思うのである。『現代銀行券の研究』のためには，どのような手順と用意のもとであたっておられるか。このことについての教をうけたいと思ったのである。

I

さきにも述べたように『現代銀行券の研究』の第1巻は『現代銀行券の基礎理論』ということになっている。その序文において，次のような言葉が記されていた。「銀行券が近代的な信用・銀行制度のもとで成立する基本的な1貨幣形態であるといっても，歴史的にさいしょそのすがたを見せてからこんにちの展開された形態にたっするまでのあいだ，銀行券は幾変遷をとげた。近代的な形

態の銀行券といわれるところの，ある程度に発達した産業資本の段階での銀行券をいま研究の理論的・現実的起点としてとりあげてさえも，われわれは，銀行券が金本位制度下の完全ないみでの兌換銀行券の形態から，金本位制度停止下の完全ないみでの不換銀行券の形態をへて，さらにそれらとはちがう1950年代いごの現代銀行券の形態への幾推転をたどっているのをみる。」(『現代銀行券の基礎理論』序文，1ページ)と。

産業資本段階の銀行券があった。金本位制度下の完全な意味での兌換銀行券は，金本位制度停止下の完全な意味での不換銀行券へと転態していった。それはさらに1950年代以後の現代銀行券へと推転してゆく。銀行券は歴史的に幾変遷をとげてきた。この最後の現代銀行券の研究が教授にとっての最終にして本来の課題であることは，もとよりいうまでもないところである。そこでこの最終本来の課題が，教授によってどのような仕方で解明されようとしているかが，わたくしにとっての関心になる。次のように，引き続いて記されている。「このような，銀行券の形態にみられる幾推転は，じつは資本家的経済の発展にそう必然的な随伴現象として理解されなければならないものであろう。それはともかくとして，銀行券形態のこのような幾推転が，銀行券の本質と運動のうえでの幾転化をいみするのだとすると，銀行券のそれらの諸形態を無差別的にうけとることはできないはずだ。こうして，銀行券のそれらの諸形態における区別が問題となる。」(同書，同上箇所，1ページ)と。

区別が現代銀行券にいたる固有のとるべき手段であるかのごとくである。歴史上の幾変遷を経て現代銀行券が生じた。現代銀行券の本質や運動を知るためには，そういうさまざまの歴史的諸形態のあいだの区別がなされねばならぬということにあるらしい。ところで教授は，右の言葉を敷衍するかに，さらに次のように述べられている。「現代銀行券が他の諸形態の銀行券とはちがうどんな本質と運動のもとにあるか，ということは，資本主義の現代的形態の特質に照応する構造変化的な事態として把握されなければならないのだとしても，現代銀行券の本質と運動の特殊性は，なによりもまず，銀行券そのものの研究，とりわけ，先行諸形態の銀行券の本質と運動にかんする予備的・基礎的な研究によってあきらかにされなければならない。したがって，現代銀行券の研究のためには，さしあたり，現代銀行券それじたいの研究からはなれた銀行券そのものの基礎理論的な研究——先行諸形態の銀行券や，それらの諸形態の銀行券とは本質的にちがう不換紙幣(不換国家〔政府〕紙幣)やの基礎理論的な研究——にわれわれは足をとどめなければならない。」(同書，同上箇所，1—2ページ)

現代銀行券それじたいの研究から離れた銀行券そのものの基礎理論的な研究がさしあたっては必要であるといわれる。さきには銀行券諸形態のあいだの区別が必要であるといわれていたが，ここでは現代銀行券とは異なる銀行券そのものの予備的基礎的研究の必要が主張されているわけだ。そのことによって現代銀行券の本質と運動の「特殊性」が明らかにされうるという。「特殊性」という言葉が用いられている。特殊性ということだから，一般に銀行券諸形態を通じる「一般性」というものが承認されてでもいるのだろうか。そういう一般性と区別される意味での「現代銀行券の本質と運動の特殊性」が明らかにされうるためには，現代銀行券とは異なる一般に銀行券そのものの基礎理論的研究から初めなければならぬということなのであろうか。しかしながら「銀行券そのものの基礎理論的な研究」という言葉には，上掲の引用文によれば，次のような補足が付されていた。「——先行諸形態の銀行券や，それらの諸形態の銀行券とは本質的にちがう不換紙幣(不換国家〔政府〕紙幣やの基礎理論的な研究」と。

「銀行券とは本質的にちがう不換紙幣」の研究までも「銀行券そのものの基礎理論的な研究」の範囲にどうして入れられるかは，われわれの理解に苦しむところであるが，それはそれでさておこう。現代銀行券に先行するという銀行券の諸形態にかぎってここでは問題にすることとして，それにはわれわれの知るかぎりでもいくつかの形態のものがあった。17世紀の末期のイングランド銀

行券にみるような原蓄時代のそれがあり，スミスやリカァドゥが問題としたようなマニュファクチュアや産業革命の時代の銀行券があり，さらには兌換が停止されて生じた銀行券の形態もある。これらすべてのものを銀行券そのものの概念で括弧にくくりうるには，あまりにもそれらのあいだには時代や段階にともなう差違がある。けれども教授によれば，「銀行券と本質的にちがう不換紙幣」までもふくめて，このようなさまざまの通貨形態についての研究が，銀行券そのものの基礎理論的な研究になり，それがつまりは現代銀行券にとっての基礎理論となるといっておられる。どういうわけで，そうなるのか。予備的意味での研究にはなりうるであろう。さまざまの通貨のあいだの比較や区別がなされるならば，現代銀行券の性質もそれに対比せしめて明らかにすることができるであろうから。そこではやはり「区別が問題となる」わけだ。けれども銀行券についての一般性や本質のごときを，つまりは銀行券そのものを明らかにしうることにはならない。どうして「特殊性」としての現代銀行券の研究にとっての基礎理論となりうるであろうか。要するに，教授が基礎理論的研究といわれる意味は，比較や区別のための素材を先立って用意する準備の措置，予備的研究といった程度のものでしかないかのように思われてくる。

けれども教授にあっては，実際はそうしたものではなく，「基礎理論」ということに，なにか特殊に方法論上の意味をこめて第1巻『現代銀行券の基礎理論』を書いていられるのではないであろうか。わたくしもまた，この「基礎理論」という表題の言葉に同様の意味での期待をひそかに抱いたものであった。そこでわたくしとしては，もう少し教授の言葉に聞いてみたいと思うのである。

II

第2巻において，次のような言葉をわれわれは見出す。「現代銀行券を研究するための基礎理論——現代銀行券の研究そのものではなく——というのは，現代銀行券に先行する諸形態としての銀行券そのものを理解するための基礎理論をうちにふくんだものなのであった。というのは，先行する銀行券諸形態それじたいの基礎理論にたいする正しい解明を前提としてはじめて，先行諸形態から現代的形態への銀行券の転化の理論と現実とが体系的にあやまりなく把握されうるのだからである。」(『現代銀行券の研究』第2巻『兌換銀行券と不換銀行券』昭和38年，序文，2ページ)

先行する銀行券諸形態についての研究が後来する現代銀行券の研究にとっての基礎理論となりうる，ということの意味は，先行諸形態についての正しい解明が前提となって，そこから現代銀行券への転化の理論や現実が体系的にあやまりなく解明されうるからであるという。このことは，「先行諸形態の銀行券そのものの基礎理論にたいするひとびとの理解と解明のしかたは，現代的形態の銀行券それじたいの諸問題にたいするひとびとの考えかたを基本的にきめる」(同上，2ページ)という言葉でもっても繰返えされている。そこでまず第1にわたくしたちの気づくことだが，教授における基礎理論といわれる意味は二重に用いられているようだ。一方では，現代銀行券に先行する諸形態としての銀行券そのものを理解するための基礎理論という概念の仕方，そして他方では，このような先行諸形態についての基礎理論が現代銀行券の研究にとって基礎理論になると解されている。実際はこれら2つの意味がダブらされて，教授においては基礎理論という言葉で用いられているようだが，しかしこういった概念使用におけるあいまいさは，わたくしが現在問題としている本来の中心にとっては，さしあたり重要なことではない。重要なのは，それよりも，先行の銀行券諸形態についての基礎理論が，いかなる意味と関連において，現代銀行券の研究にとっての基礎理論となりうるかということである。

教授によれば，先行諸形態の基礎理論にたいする正しい解明の仕方が前提となって，「先行諸形態から現代的形態への銀行券の転化の理論と現実とが体系的にあやまりなく把握されうる」といわれる。その意味するところは，現代銀行券は先行諸形態から転化されて生じたものであり，現代銀行券の研究とは，このような転化と，また転化に

よって生じた新規の現実についての理論であり，そういう意味と関係において，先行諸形態についての研究が後来する現代銀行券のそれにとっての基礎理論となりうるという理解なのであろうか。もしもそうであるならば，基礎理論ということについてのさきとは別箇の理解になる。さまざまの銀行券諸形態を並列させた上での単なる区別やら比較の問題ではない。歴史の時間的推移の過程において前後しており，先行するものが出発となり前提となって，後来するものは生じうる。そのときの生起は，先行するものそれ自身が転化されての後来するものの生成であり，先行するものは後来するものにとっての素材であり，つまりは歴史的推移・変転の過程における止揚にほかならない。止揚される出発・前提・素材と止揚転化によって生じた後来する生成と転化物とのあいだの歴史的に内面的な，時間的に素材的な，過程的に先後する変換の関係——そういう関係において，先行するものについての理論が後来するものの正しい解明のための前提であり，それを制約し，したがって後来するものにとっての基礎理論となりうる——このような意味で先行諸形態の理論が現代銀行券の研究にとっての基礎理論になるとされているのであろうか。

しかし教授は，上述の引用文に続いて，次のように，これを布衍されているのである。すなわち，「ここに先行諸形態の銀行券そのものの基礎理論というのは，兌換銀行券と不換銀行券との本質・運動にかんする基礎理論から，兌換銀行券・不換銀行券の運動をめぐる周辺の諸問題，とりわけ物価変動の諸問題にかんする基礎理論にいたるまでのごくひろい問題領域にわたる兌換銀行券・不換銀行券の基礎理論のことである。そしてまた，ここに兌換銀行券・不換銀行券というのは，げんかくな古典的金(金貨流通・金地金)本位制度のもとでの兌換銀行券とそれの全面否定的形態としての不換銀行券，すなわち完全ないみでの兌換銀行券・不換銀行券，いいかえれば理論的抽象的典型・モデルとしての兌換銀行券・不換銀行券のことである。そのような兌換銀行券と不換銀行券にかんする基礎理論的研究が前著でおこなわれているわけだ。現代銀行券研究のための基礎理論がそこで展開されている，というのは，このいみである。」(同上，2ページ)と。

兌換銀行券と不換銀行券の理論は，ともに先行諸形態の銀行券そのものの基礎理論であり，ともにまた現代銀行券研究のための基礎理論になるといわれる。ところがそういう銀行券そのものが実は内部に全面否定的対立を含んでいた。不換銀行券は兌換銀行券の全面否定的形態であるといわれる。全面否定的形態という言葉がでてくる。それはどういう意味のものか。兌換銀行券が銀行券であることまで全面的に否定される意味のものであれば，不換銀行券はもはや銀行券そのものではないことになる。銀行券そのものでありながら全面否定的形態ということの意味をあれこれと推察してみて，それはどうも兌換が否定されて不換となるという意味以上のものとは思えない。銀行券としての資格はそのままで，したがって銀行券そのものとしては変りはないが，ただ兌換が否定されて不換化された銀行券というほどのものと解されよう。しかしこう推察してみてやはりそこから，わたくしたちには実は新しい疑問が生じてくる。いうところの不換化とはなんであるか。歴史的に事実上，兌換が否定されて不換銀行券になるということなのか。いいかえれば，事実としての不換化のことなのか。それとも単に，兌換を観念の上でひるがえしてみていうにすぎない不換という意味なのか。すなわち単に観念や理論の上での不換ということなのであろうか。

上記の引用文に従えば，「厳格な古典的金本位制度のもとでの兌換銀行券とそれの全面否定的形態としての不換銀行券」ということであるから，前者の意味にもうけとれる。と同時に，「すなわち完全な意味での兌換銀行券・不換銀行券，いいかえれば理論的抽象的典型・モデルとしての兌換銀行券・不換銀行券のことである」と記されていて，後者の意味にも読める。こうした点は教授によれば，どのように把握されているのであろうか。どうも明確には分りかねるが，どちらかといえば，後者の意味の方が強そうだ。もしもそうであるなら，理念の意味での不換銀行券についての研究は，

すぐれて現実具体的な現時代の銀行券の研究にとり，どういう意味と関連において基礎理論となることができるのであろうか。

もちろん抽象やモデルによる理論の研究が，無用であるなどというのではない。理想型を用いての研究が現実分析にとり欠くことのできぬ用具となりうることは，いうまでもない。問題はむしろ，その際に用いられる類型やモデルそれ自身の作成にひそむのである。終局的研究の目標である歴史的に具体的な現実と内面的必然的関連をもつことのない抽象化や典型であるならば，現実分析にとっての役には立たない。これを銀行券の研究について考えてみると，不換化銀行券の例としては，ナポレオン戦争の時代に生じた不換化イングランド銀行券がある。しかしそれは戦争がもたらした一時の現象にすぎなかった。戦争という異常な状況が過ぎ去ると，兌換銀行券へと帰っていった。同様にして，その後の産業資本主義の過程において恐慌は頻発し，そのようなときには，イングランド銀行はしばしば兌換の停止をよぎなくされた。けれども恐慌の嵐が過ぎ去ると，兌換は必ず再開された。銀行券というものは本来兌換されるもの，兌換さるべきものと考えられていたからだ。銀行券は産業資本の当初から兌換銀行券であったし，また兌換銀行券でなければならなかった。したがって銀行券そのものの典型を歴史の現実の上に見出そうと思うならば，産業資本主義の時代における兌換銀行券に求める以外にはない。もちろん典型というかぎりにおいては抽象化されて生じた観念の所産にほかならないが，時代の現実が観念に投影されて作られたモデルであれば，それは現実的な典型である。そこにおいては，歴史の現実と理念とが合一する。ところで産業資本の歴史は，その過程みずからの帰結として，資本制再生産の新しい歴史的段階へとふみこんでゆくことになった。これにともない，銀行券もまた転変する。銀行券の不換化が常態化して，いわば常置的制度となるにいたった。こうして現代銀行券が現われる。もしもこのような歴史的推転の事実から切り離されて，兌換銀行券や不換銀行券のモデルが作られ，したがってそれについての理論が述べられるのであれば，単に観念の作為に止まり，現実具体的な現代銀行券の研究にとっての基礎理論となることはおぼつかない。

もう1つここでわたくしは考えてみたい点がある。教授における理解が，歴史的現実の投影にほかならぬ現実的典型であると解してみても，そこにはやはり問題が残る。それは不換化という過程についてのことである。1つの典型としてみられた兌換銀行券がもう1つの典型である不換銀行券へと転化される不換化という推移の過程も，またそれ自身典型とみて，理論の対象とすることができよう。けれどもその場合，不換化とは，兌換銀行券や不換銀行券におけるような空間的実体を意味する概念ではない。時間の上での推転，すなわち現実的転化を意味する歴史における動的に否定的な過程の概念にほかならぬ。それは飯田教授によれば，全面否定的という言葉で示されていた。不換銀行券は兌換銀行券の全面否定的形態であった。この全面否定的という言葉は，どういう意味のものであったか。歴史的推転の過程に含まれる動的に否定的な関連の論理が，現実的な典型としてとらえられて，全面否定的という言葉となったのかどうかは疑わしい。それよりもむしろ単に形式論理上の抽象的否定の概念に用いられているふしがある。

ここにおいてわたくしは，不換化の過程の理論については，教授の論述からしばらく離れて考えてみるよりほかはない。その場合にわたくしには，次の諸点が注意に値するように思われる。(1)兌換銀行券は，不換銀行券にとっての歴史的前提であり，現実的出発となり，それゆえにまた生成にとっての素材となる。このようにして不換化された銀行券の内面には，兌換銀行券におけるさまざまの規定が否定的に止揚の関係において保持されざるをえない。不換銀行券の本質や運動を学ぼうとする際，兌換銀行券についての研究が基礎理論となりうるというのは，まさにこのような意味と関連によるものであり，それ以上のものではなく，またそれ以下のものでもないのである。(2)しかしながら不換銀行券はやはり兌換銀行券が不換化して生じたものであって，兌換銀行券と同じであ

るはずはない。したがって兌換銀行券についての理論がそのまま引きのばされるという仕方において，不換銀行券にとっての基礎理論になりうるはずはないのである。そこには否定の契機がある。形式論理的に抽象的な否定ではなく，もとより言葉や観念の上での全面的否定に止まらぬ。動的に歴史的過程における現実的な否定である。そのゆえに初めて真実に具体的に全面的否定となることができた。とともに，それにもかかわらず，そういう現実具体的否定の結果として不換銀行券は生成し，銀行券としての資格において，それは兌換銀行券に連続する。否定されながらも肯定され，断絶しながらも連続して，不換銀行券という実体的な統一である。現実具体の歴史的動的過程によるものであり，自身がまた銀行券の歴史的展開そのものにほかならぬ。(3)ところで，このような歴史的に否定的な動的過程が単に銀行券のみにかかわりをもつ問題として孤立化されて，資本制再生産の総体から切り離されて考察されるということがあってはならない。もとより銀行券の1つの形態から生じる他の1つの形態であるから，銀行券それ自身に関する現象であることは，いうまでもない。そういう意味では，資本制再生産の諸他の契機からひとまず引き離して孤立化して銀行券を考察することは，研究の便宜にもかなうのである。けれども銀行券は，やはり資本制再生産の総体からみれば，それを構成する1部分的要素にほかならぬ。他の諸要素と相互に関係をもちつつ，やはり総体としての資本制再生産過程からの規律をうける。銀行券の不換化という1つの生起は，他の部分的要素に作用を及ぼしつつ再生産の総体に当然に影響を及ぼしはするであろうが，また反対に，資本制再生産過程の総体からの規律をうけるものなのである。資本制再生産の歴史的転化の過程に随順し，その示すところに従わなければならない。もしも銀行券のみにかかわりをもつ変化とみて，再生産過程から切り離し，孤立化して不換化の過程をみるならば，抽象化されて部分的断片的認識に止まってしまう。兌換銀行券から不換銀行券への転化は，資本制再生産の歴史的推転の過程に対応するものであった。これを現代銀行券についていうならば，その生成は現代資本主義の生成におうものであり，その本質と運動とは現代資本主義の再生産過程の総体により規制されざるをえないのである。

III

ようやく現代銀行券についての考察をなすことができるところにまできたように思う。そこでここでも，さきにおけると同様に，現代銀行券が生じるにいたった経過からふりかえってみることから始めよう。さて，英国においてナポレオン戦争が終了し，制限の時代がすむころには，預金銀行の台頭が起り，それは預金通貨を造出してこれを管理し，イングランド銀行の方はこれにたいし，一般的流通手段現金としての銀行券を供給する立場に変っていった。イングランド銀行券には，1833年の条例でもって法貨としての承認が与えられ，国家による支援をうけて，私的な信用通貨の性格から，国民的に一般的な流通手段の方向へと発展してゆくことになったのである。19世紀の終りには，中央の独占的1大発券銀行を中において，これを市中の預金銀行がとりかこむ近代銀行分業体系の集中的組織化があらかたのところ完成した。しかしそういうころに資本制再生産の内部には株式会社組織による独占的大企業を中心に，産業と金融における集中と組織化は進んでいった。産業資本主義の段階から独占資本主義の段階へと移行するようになったのであり，産業と金融の過程を結びつけて金融資本と呼ばれるものが生じるにいたった。それに国家が関係を深めてゆくようになった。産業資本主義が1度みずからの外におい出したはずの国家の役割が独占資本主義にいたってふたたび内にとりもどされる。中央銀行は国民経済の頂点に立つ独占的1大貨幣・金融機関なのだが，国家と経済との接触地帯にあって，自然それに対応する地位と機能とをうけとらされることになったのである。国民的産業政策としての利子政策に注意が向けられるようになったのは20世紀に入ってからのことである。第1次世界大戦が兌換の停止をもたらし，戦争がすんでそれは再開されたが，1929年に始まる世界大恐慌を契機

として不換銀行券の時代がくる。第2次世界大戦が起り，それがすみ，そして今日になっても，兌換が再開される様子はない。不換通貨は現代資本主義にとっては，いまや切り離すことのできぬ制度となって固定されたかにみえるのである。これとともに，経済における国家の役割はいっそう強まるようになった。国家は経済に力を及ぼそうとするに際して，中央銀行をその前に見出す。不換化された通貨を現代国家は諸政策の手段として現代資本主義のために用いている。中央銀行がそういう地位と役割とにおかれており，したがってその発行する銀行券は，これに照応する性格のものに転化された。われわれが問題とする現代銀行券は，このようにして生じたものであった。

右のような推移に含まれる歴史的理論的関連を飯田教授は，その『現代銀行券の研究』において，どのようにつかまれようとされているのであろうか。銀行券の歴史における推転に注意をむけられていないわけではないことは，すでに初めに引用した教授の言葉にみても明らかである。「歴史的にさいしょそのすがたを見せてからこんにちの展開された形態にたっするまでのあいだ，銀行券は幾変遷をとげた。」「このような，銀行券の形態にみられる幾推転は，じつは資本家的経済の発展にそう必然的な随伴現象として理解されなければならないものであろう」といっておられる。けれども単に必然的な随伴現象という程度に止まる。だからこそ右に続いて，次のような言葉が語られることになったのであろう。「現代銀行券が他の諸形態の銀行券とはちがうどんな本質と運動のもとにあるか，ということは，資本主義の現代的形態の特質に照応する構造変化的な事態として把握されなければならないのだとしても，現代銀行券の本質と運動の特殊性は，なによりもまず，銀行券そのものの研究，とりわけ，先行諸形態の銀行券の本質と運動にかんする予備的・基礎的な研究によってあきらかにされなければならない。したがって，現代銀行券の研究のためには，さしあたり，現代銀行券それじたいの研究からはなれた銀行券そのものの基礎理論的な研究……にわれわれは足をとどめなければならない」と。こうした述べ方のあいまいさ，および当をえていないことについてはすでに述べているから，ここではふたたび繰返えさない。それよりも次の言葉がむしろ注目されるべきである。

「本書(と続巻)が従事している不換銀行券論争そのものの全体は，おなじ根・おなじ幹の現実的問題意識のうえにたつ関連的な他の諸論争，たとえば，現代資本主義論争・現代インフレーション論争・金『価格』(価格標準)論争・管理通貨制度論争などの統一的・総合的解決によるのでなければ，おそらく効果的に終末をつげることはできない性質のものであろう。」(同書，第2巻，23ページ)と。しかしわたくしの立場からいうならば，統一的総合的見地に立つのでなければ，現代不換銀行券についての正しく充分な理解はえることのできぬことを，むしろ高調したいくらいである。兌換銀行券や不換銀行券をどのようにひねってみても，そこからは現代銀行券におけるすぐれて現時代的な特質は出てはこない。現代銀行券における現時代的性格は現段階の資本主義を特色づける諸規定に固有には由来し，それにより規律されるものであるからだ。このことを，もう少し考えてみることにしよう。

独占は自由な産業資本主義の過程から生じた。産業資本主義に固有の競争の論理が，みずからにとっては対立物である独占を生ぜしめることになったのであるが，一端こうして独占が確立されると，こんどはそれを生ぜしめたはずの自由と競争の原理が独占という新らしい生成物に従属せしめられることになる。これを銀行制度についてみるならば，産業資本主義における兌換銀行券は独占資本の形成とともに，その形態や機能を変えてゆき，独占的1大中央銀行が発行する兌換銀行券にいたっては，信用通貨とはいいながらも，国家権力による支持をうけて，国家紙幣にも似た実質を帯びざるをえないことになる。そこから不換銀行券の時代がやってくる。再生産への国家の干渉という契機は強まり，それはしだいに制度化され，ついに国家独占資本主義の段階に特有な不換銀行券の制度が現われる。もちろんそれを直ちに国家紙幣と同一視できない。国家紙幣は金貨幣の流通

を前提とし，それが政府の発行する紙券におきかえられるという関連と時期において生じるのだが，現代銀行券の方は産業資本主義における兌換銀行券が不換化され，国家独占資本主義段階にいたって生成する銀行券の形態であるからだ。歴史的にも論理的にも位相が違う。公的に一般化されて強制通用力をもつようになり，国家紙幣にも類する実質を備えることになるのであるが，やはり銀行が発行して管理する銀行通貨であって，国家紙幣そのものではない。したがって国家紙幣の原理をもってぢかに説明されたり，またそこから直接に導き出せるようなものではない。といって産業資本の時代の兌換銀行券と同じなみに信用通貨とみるならば，銀行券の歴史における推転の事実と関連は無視されてしまう。現代銀行券は，産業資本主義における兌換銀行券が不換化されて生じた現代資本主義における銀行券の形態であるからだ。そこでもしも，このような歴史的論理的位相の差違をとび越えて，産業資本の段階における銀行券についての理論からぢかに現代銀行券を説明しようと試みるならば，その一切は詭弁に陥いるよりほかはないのである。

要するに矛盾する2性格の統一である。矛盾であればこそ現実的といわざるをえない。現代資本主義それ自身が矛盾する2性格の統一であるのと同様に。私的に個別的な信用通貨が公的に一般化されつつ現代銀行通貨へと止揚されてゆく過程そのものは，私的に個別的な資本主義が独占化されて公的に社会的な性格を強めてゆく経済発展の過程と表裏する。それ自身矛盾をはらむ現代銀行券は，同じく矛盾を内包して推転してゆく現代資本主義という統一において，その部分的1契機となって機能することにおいて，特有に現段階的性格を再生産の総体から刻印されているのである。

このような関係が現代銀行通貨の価値決定の上にも現われてくることは当然である。飯田教授が指摘されているように，「不換銀行券は価値表章としての本質をもち，紙幣流通の独自の1法則に支配されて運動する」(第2巻，20ページ)。けれども同時に，「貸付発行者にとって追加的な擬制的利子つき資本としての本質をもつので，《独特の流通過程》のなかでの兌換銀行券とおなじように，《利子つき資本の還流法則》=貸付・借入——回収・返済(G−G′)の運動法則にしたがって必然的に伸縮・生滅する」(前掲書，21ページ)。このように貨幣面からの規定と，貸付取引の面からの規定との二重性によって，現代不換銀行通貨の価値が規定されるということは，飯田教授のまさに指摘されるとおりである。前者の規定においては，現代銀行券は国家紙幣のごとくに現われる。そして後者においては兌換銀行券におけると変わらない。現代銀行券の価値を規定するものとして，このようにあい矛盾する2つの契機が見出せるのだが，それは現代銀行券が産業資本主義における兌換銀行券が不換化して生じた国家独占資本主義の段階の通貨であることによるのであり，そしてまさにこのこと自身が同時に，現代銀行券の価値を決定するものは，単に右の2要素のみに止まるものではないということの本来の理由ともなるのである。産業資本主義における銀行券の価値は，これと兌換される金の分量により規定される。価値をこのような関係に定めておいて，あとは産業資本主義の自由にして自然な過程のおもむくところに委ねた。市場の自然に帰向するところに銀行券の流通量は落着いていった。ところが資本主義の現段階では，このように自律的で自然な適合の過程というものはありえない。独占資本により，または国家により，大なり小なりの干渉をうけ，銀行券の価値は変動する。銀行券からは，拠るべき固有の価値基準となるようなものは，取り払われた。通貨の価値が可変でありうるようにと，不換の制度に作り変えられたとさえいってよい。現実に価値がどこに定まるかは，上記2要因にも依存するが，不換銀行券を再生産の1機能要因として働かしめる現代資本主義の総過程の事情にも依存するのである。そしてこのことの意味の方がむしろ重要である。

現代資本主義には，それに特有な景気変動の過程がある。後退する景気を阻止するための国家による赤字の財政支出が行なわれており，物価の低落は阻止されるばかりか，引上げられさえすることがある。独占的大企業を中心に管理価格という

現象が現われてきて，後退する景気の局面にあってすら，物価は下落しないばかりか，高騰さえする。団体的交渉力をもって形成される賃金には，かつての市場における自然なる水準というものは見られない。こうして景気・不景気の交替を繰返えしながらも，物価の水準は傾向的にはしだいに高まりつつあるのが，現代資本主義における通例の現象となってきた。マイルド・インフレーションとかクリーピング・インフレーションという言葉が生じるにいたった。こうしたことが可能なのも，もとより兌換が停止されているからだ。というよりも，このような状態が生じうるようにするための条件として，銀行券は不換のままにおかれている，とさえいってよい。それは国家紙幣の実質を帯びる。しかし銀行券であることには変りはなく，銀行券という形態を規律するさまざまの規定からの支配をまぬがれない。とともに，現代資本主義再生産過程に特有な諸要因からの規定をうける。このような各種要因からの作用をうけて，現代不換銀行通貨の価値は現実に定まる。もちろんこれら諸要素のあいだには，一定の内面的必然的な関係があり，単にこれらを平面的に並べるだけですませるようなものではない。そういう内面的関連の論理を明らかにすることが，現代銀行券の理論にとっての終局の課題・目標でなければならぬことは，いうまでもないが，ただいまのところは，この点についての考察を立入って行う場所ではないだけである。

むすび

現代銀行券は，現代資本主義という歴史的段階が生み，そのために用い，したがってそれに特有の性格が付与されている1制度であった。現代銀行券を国家紙幣と変わることのない価値章表と同等にみることは，それが銀行券であるという事実を見落している。といって，それを兌換銀行券と同じなみに信用通貨であるとするならば，現代銀行券を規定する国家の役割は看過される。といって右の2つだけをとり上げて，現代銀行券の価値を規律するに足る十分な条件であるとみるならば，現代銀行券を包んで規制する総体である資本制再生産の現段階の意義が消えうせてしまう。現代銀行券は，現代資本主義と同様に，歴史に導かれて生じた1制度であった。それにともない，一定の歴史的に論理的な構造をもたざるをえない。先行する産業資本の時期の兌換銀行券や，それが不換化して生じた銀行券についての規定のあるものは，歴史的止揚の関係において，現代銀行券のうちに引きつがれている。この意味においては，先行銀行券諸形態についての研究は現代銀行券のそれにとり基礎理論となることができる。現代銀行券という止揚の立場からかえりみて，先行諸形態についての研究が，かくのごとき意味と関連において基礎理論になりうるということであって，兌換銀行券や不換銀行券についての研究が現代銀行券の見地から切り離され，孤立化されてバラバラであり，せいぜい羅列か比較の関係において現代銀行券にとって，基礎理論になりうるというのではない。現代銀行券におけるすぐれて現時代的な特質は，もとより現代資本主義の特質に負うものである。現代銀行券に関する諸規定は，内面的に必然的な一定の歴史的論理的構造をもつものであり，そしてこのことは，それを包んで規制する現代資本主義における同様の歴史的に論理的な内面的構造の必然性に対応するものでなければならない。現代銀行券は現代資本主義の通貨である。現代資本主義の構造と性格という総体の立場からみるのでなければ，総括的で最終の具体的把握をえることはできない。(1963・8・5)